

龍谷大学世界仏教文化研究センター公開研究会
(第27回仏教文化セミナー)

講演名	釈尊の出家動機-仏伝における「四門出遊」の成立-
開催日時	2017年7月27日(金) 13:15~14:45
場所	龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室
講演者	天野 信氏 (仏教文化研究所客員研究員)
司会	能仁 正顕氏 (龍谷大学文学部教授)
主催	龍谷大学仏教文化研究所 (能仁研究班)
共催	龍谷大学世界仏教文化研究センター
参加人数	22人

【講演のポイント】

ブッダの伝記が抽出できる仏伝文献類には、様々な逸話が含まれている。講演は「四門出遊」のエピソードについて注目した内容であった。天野氏はこれまでの蓄積されてきた初期(原始)仏教研究について初学者にもわかるよう、仏伝そのものの性格について解説をした後に、釈尊の出家動機において浄居天(じょうごてん)の神々が密接に関わっていることを明らかにした。また『大本経』を始めとする南伝資料には、仏陀ではなく、過去仏の事蹟として「四門出遊」が描かれていることが豊富な参考資料とともに提示された。

【講義の概要】

■仏伝について

仏伝とは、釈尊の生涯における重要な事蹟のことであり、「釈迦八相」として八つの場面にまとめられたり、「四大事」と名付けられて四つの場面で語られることがある。その原典は、初期仏典(漢訳阿含とパーリ語ニカーヤ、律蔵)に見ることができる。しかし、それらは断片的で、釈尊の生涯丸ごとの一代記を残しているのではない。初期仏典の断片的な記述をつなぎ合わせることによって、釈尊の一代記は知りうるようになる。降誕から涅槃までを体系的に記載する仏伝が登場するのは時代が下って大乘経典の登場を待たなくてはならない。その頃には文献のみならず、美術作品を通して釈尊の生涯を知ることができるようになる。

■過去七仏と仏伝

紀元前後になると仏陀観も一様ではなくなってくる。多仏信仰が盛んになり、過去仏の登場が要請される時期だ。天野氏によると過去仏とは「過去にダルマ(法)を発見した人」と規定され、過去七仏について詳細に記す『大本経』の解説が行われた。『大本経』の構成は(1)七仏の事蹟→(2)ヴィパッシン仏伝→(3)浄居天の神の報告の順で成り立ち、(2)において菩薩の誕生、四門出遊、出家、成道、梵天勸請、初転法輪、サンガの成立、波羅提木叉の誦出といったトピックが語られている。

ここで、釈尊はいかにして過去仏の生涯の出来事を知り得たのかという疑問を比丘たちは抱いたという。釈尊による回答は「神たちが釈尊に過去仏の存在を告げたため」とされている。その神とは誰なのか。それは釈尊が以前に、浄居天へ訪問した時に面会した神たちであり、この神たちはかつての師であった過去仏の事蹟を釈尊に伝えることが可能な存在として描かれている。

■「四門出遊」と浄居天の神

過去七仏の事蹟を釈尊に報告するのは浄居天の神々である。そして「四門出遊」の状況を作り出したのも、浄居天の神々であるという。

現存の阿含・二カーヤには「四門出遊」逸話はほとんど見当たらない。ただし、釈尊の出家以前の生活は裕福であったが、生老病死の逃れ難き事実に恐怖するという記事は存在し、それが「四門出遊」エピソード成立の素材になっている。ジャータカの注釈書、『ニダーナカタール』には、神たちが王子に対して成道の前兆として意図的に老人を作り出して示したことが記されており、上座部大寺派では「四門出遊」は過去仏の事蹟として確立され仏伝に組み込まれた。一方、北伝の仏伝になると「四門出遊」は釈尊の事蹟へと変化する。

【まとめ】

天野氏は、初期仏典の資料を用いて「四門出遊」エピソードの差異と形成過程を示された。『大本経』中の「全てのブツタの生涯は共通する」という通底概念をピックアップし、そこに浄居天の神の役割を明確にした。「四門出遊」と同程度有名なエピソードである成道後の梵天勸請(説法勸請)では、浄居天の神々はどのような役割を果たすのか。また梵天という神の登場自体は、浄居天の神々にどのような影響を及ぼすのか。引き続き説法勸請についても研究を進めるといふ今後の展望に期待の持てる講演であった。

以上

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員 金澤豊